桔梗野小

関わり合い、考えを深め、解決する子の育成

～主体的に学び合う活動の工夫を通して～

（３年計画の２年次）

校長　　吉田　朝子

１　研究主題について

⑴ 学校目標具現化の立場から

本校の今年度の学校目標は、「自分を大切に　友だちも大切にする子の育成」である。主体的に問題解決に取り組むためには、問いに向かって自分なりの考えをもつことが重要となる。自分の考えや立場を明確にさせることは、「自分を大切に」することにつながる。また、学び合いの場面で対話的活動を設定し、関わり合いながら考えを深めさせるには、「友だちを大切に」する態度の育成が不可欠である。よって、本主題に取り組むことは、学校目標の具現に資するものである。

⑵ 研究の経過から

これまで、「関わり合い、考えを深め、解決する子の育成～主体的に学び合う活動の工夫を通して～」という研究主題で取り組んできた。導入段階では身近で興味のわく問題の提示やICTの活用をすることで、児童が自分のこととして課題を捉えて主体的に学習課題に取り組む姿が見られた。さらに、個の考えをもって対話に臨むことで目的意識が高まり、関わり合いの中で伝えたり表現したりという活動が円滑に進むようになった。形態を変えたり、繰り返し意見交流を行ったりすることで、活発な対話的活動が持続するようになり、関わり合いから思考力や問題解決力を高めることができた。

このように、学び合いに対する児童の意欲と問題解決力は向上したものの、問題解決における個々の迫り方にはばらつきがあり、思考のこだわりに対する整理、思考の共有化、転換などは、これからも手立てを工夫して再構築する必要がある。

そこで、今年度は３年計画の２年次として、昨年度までの算数科における研究成果を生かしつつ、教科の枠を取り払いすべての教科・領域に実践を広げ、対話的活動から思考を深めて問題解決への迫り方を共有する効果的な指導のあり方について研究を進める。また、すべての通常学級において研究主題へ向けて授業を公開することによって、目的意識をもって問題解決に向かう授業づくりに全校的に取り組んでいく。充実した対話的活動への取組のもと、目的意識をもって問題解決に向かう目指す児童像に迫っていきたい。

２　研究のねらい

関わり合いの中から、考えを広げたり深めたりして、主体的に学ぶ児童を育てるための指導の在り方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

教師の働きかけや発問を工夫して、関わり合いの中から考えを深める授業を日常化することにより、問題解決に向かおうとする児童を育成することができる。

４　研究内容

⑴ 主体的に問題解決に向かう指導の在り方。

ア　導入場面で、問いをもたせる課題（問題）提示の工夫。

イ　問題解決へ向かうための対話的活動の工夫。

⑵ 学びのわざの継続による主体的に学ぼうとする態度の育成。

⑶ 学習用語などの掲示による、学習の手がかりになるような環境の整備。

５　研究の経過

⑴ 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者等
５	１１	授業公開①算数　　３年１組　　教諭　國分　裕子
６	８	授業公開②国語　　５年１組　　教頭　淡路　秀一
６	１４	授業公開③道徳　　４年１組　　教諭　田島　結希子
６	２９	第１回授業研究　（要請訪問）４年２組　道徳　　授業者　教諭　長谷山　有也
７	２０	授業公開④自立　　楓学級　　教諭　柴田　英子　　桔梗学級　　教諭　高井　美紀子
７	２２	小教研授業発表⑤特活　　５年１組　　教諭　吉田　千春
９	１２	授業公開⑥算数　　３年２組　　教諭　吉谷　恵理子
９	２１	授業公開⑦国語　　１年２組　　教諭　角田　歩美
１０	２６	第２回授業研究　（小教研授業発表）２年１組　道徳　　授業者　教諭　澤田　実希
１１	２	第２回授業研究の成果と課題について、動画視聴、校内での協議会
１１	９	授業公開⑧体育　　５年２組　　教諭　　金枝　成弥
１１	１４	授業公開⑨社会　　６年１組　　教諭　　桑田　勝護
１１	３０	授業公開⑩算数　　１年１組　　教諭　　長谷部　幸恵

⑵ 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	２７	特別な配慮を要する児童の理解　　担当：本校教諭　高井　美紀子
５	１１	「１人１台端末活用」の研修　講師：総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事
６	８	「救急時の手当てと対応」ＡＥＤ、一次救命処置、応急手当てについて　担当：本校養護教諭　井上　佳林
６	２２	「生徒指導上の重要事項」　　担当：本校教諭　桑田　勝護
７	２２	幼保小こ連携推進事業　こもれびのもり幼稚園参観
８	２３	ＩＣＴに関する研修　　担当：本校教諭　桑田　勝護　　吉谷　恵理子
８	３１	県学習状況調査の分析・考察
９	１４	「特別支援に関する研修」　　講師：旭ヶ丘小学校　中奥　尚子　校長先生
１１	３０	幼保小こ連携推進事業　桔梗野保育園参観

６　研究の成果

⑴ 具体的な問いや視覚に訴える問題提示により、問いを意識させ主体的に問題解決に向かわせることができた。対話的活動では形態を工夫することで、自信をもちながら他者の意見を取り入れ、さらに全体での問題解決力の向上につながった。

⑵ 理由をつけて話す場面では、教師が力をつけたい部分を意識して声がけしたことにより、考えを整理しながら話すことができるようになった。振り返りでは、学習内容により「書く」「話す」を適切に取り入れることで、児童が継続的に学びの積み重ねを行い主体的な態度が育成された。

⑶ 全校で学習環境を整えて既習事項を提示したことにより、問題解決の手立てや振り返りの確認になった。また、「正しい言葉を正確に」という意識が高まり、聞き方やテストの答え方に良い影響が見られた。

７　研究の課題

⑴ 問いをもたせるための時間の比重や、児童の問いの確認が難しいため、問いのバリエーションを充実させていかなければならない。話すことへのためらいなど個人差も考慮しながら、自力解決と対話的活動の時間配分を柔軟に変える対応が必要である。また、学年に応じた話し方の提示を行い、教師間で共通理解して学習を進めていく必要がある。

⑵ 学びのわざ３のうち、振り返りと、理由をつけて考えを話すことは向上したものの、家庭学習については、主体的な姿勢を捉えるには難しい部分があった。家庭環境も関わることであるため、家庭学習ではない学びのわざを考えていく必要がある。

⑶ 掲示物の量が多過ぎると、どれを見てよいのか分からなくなる児童もいるため、掲示内容の取捨選択、精選を適宜行っていかなければならない。また、学力の定着や新たなインプットを考えると提示期間や教科、提示場所なども考慮していく必要がある。

（記入者　田島　結希子）